

タスキをつないで、みんなでゴール

去る5月14日日曜日。快晴の空のもと、瀬戸内海をイメージさせる真新しい青色のトラックが万緑の屋島に見事に映えた屋島レクザムフィールドで「屋島GENPEIリレーマラソン」が行われました。3人から10人まででチームを組み、22キロメートルと42.195キロメートルの部に分かれて場内のトラックと施設の通路、場外の園路を結んだ1周2.2キロメートルのコースをタスキをつなぐ駅伝方式のリレーで走るイベントです。一人が何周回走るかは任意。また、同じ人が何回走っても良いというかなり自由なルールです。市内外から276チーム、下は7歳から上は79歳までの合計1920人のランナーが集結しました。特別ゲストとして、弘山晴美さん、鈴木博美さん、土佐礼子さんの3人のオリンピックをお迎えし、私と地元屋島の小・中学生5人を混ぜて9人でオリンピックドリームチームを結成して、フルマラソンの距離を走りました。私が走ったのは1周回だけですが、日頃の運動不足がたたき、最後はへとへとになりながらも、どうにかタスキを次の小学生ランナーにつなぐことができました。でも、走り終わった後の爽快感は格別のものがありました。すべてのチームが完走できたそうで、走った人だけでなく、応援に来ていた家族や同僚の人たちも含め、満足感の高い思い出に残るイベントになったのではないかと思います。

感心したのは、各チームがゴールするや否や合計タイムはもちろんのこと、周回ごとのラップタイムがすぐに記録、印字され、完走証として手渡されたことです。その秘密はタスキにありました。タスキにICチップが組み込まれていて、その受け渡し場所に設置しているマットアンテナから出力される電波をICチップが反射することで計測。情報はホストパソコンからサーバーへ送られ、ランナーや関係者はアプリを使ってレース途中もスマートフォンなどでそのデータを閲覧できるようになっていたとのことでした。

駅伝競走になくはない、日本伝統のタスキもIT化されていることに新鮮な驚きを覚えました。まさに今はやりのIoT（インターネット・オブ・シングス）の活用事例です。ただし、この場合「タスキのインターネット」と訳すべきかもしれませんね。